

えっちなお店で借金返済のために働く私が、イケメンVIPにクリトリス甘やかされて衆人環境でとろえるアクメしちゃいました

えっちなお店で借金返済のために働く私が、
イケメンVIPにクリトリス甘やかされて衆人
環境でとろえるアクメしちゃいました

黒いレースが肌に食い込む感触に、私は今も慣れることができない。この店で働き始めて三週間、それでも胸の谷間や局部にあけられた小さな穴から露出する肌は、私の羞恥心を絶えず刺激し続けていた。薄暗い店内に響くクラシック音楽の流れとは裏腹に、私の心臓は激しく鳴り響いている。フロアに足を踏み入れるたび、視線という名の無数の針が全身を刺すような感覚に苛まれるのだった。

「お疲れ様です、刹那さん」

先輩の小夜子さんが、私の肩をポンと優しく叩いた。彼女の言う「お疲れ様」には、いつも少し皮肉めいたニュアンスが混じっているように感じる。彼女のエプロンの下からも、同じように開放的な下着が覗いているが、彼女はまるで日常服を着ているかのように振る舞っている。

「今日も頑張ってね。VIPのお客様もいらっしゃるらしいから」

VIP。その言葉だけで、私は喉が渴いた。この店は、入場料だけで十万円。さらに指名料を払って、私たちメイドを隣に座らせ、好きなように触らせることができる。挿入や撮影、さらには放置プレイまでもが追加料金で可能になるという、まるで欲望の聖域のような場所。そして、その聖域に足を踏み入れる人々が、いわゆるVIPたちなのだった。

私は深呼吸をして、フロアへと一歩踏み出した。調理されたばかりの香りと、高価な香水の匂い、そして人々の吐息が混じり合った独特の空気が鼻腔を満たす。赤と黒を基調とした内装の店内には、すでに何組かの客とメイドがいた。一人のメイドが中年の男性客の膝の上でうめき声を上げている。もう一人は、テーブルの上で手足を広げられ、クリトリスを指で執拗に愛撫され、涙を浮かべていた。

「刹那、来てくれたか」

声をかけたのは、常連のお客様の田中さん。銀行役員らしき、恰幅のいい五十代の男性だ。私は彼の隣の席に腰を下ろすと、彼の手がすぐに私の腰に回ってきた。

「今日も素敵だよ。この感じ、最高じゃないか」

田中さんの指が、エプロンの隙間からこっそりと私の太ももをなぞる。じんわりと熱が伝わってきて、私の体は小さく震えた。この仕事を始める前の私は、男性の体温にこれほど敏感ではなかった。でも今は、ほんの少しの接触でさえ、全身に電流が走るような感覚になる。

「どうしたんだい？ なんだか今日は元気がないようだが」

田中さんの声は優しげに聞こえるが、その目は獲物を品定めするような光を放っている。私は作り笑顔を浮かべて、彼の視線に耐えるしかない。

「いえ、そんなこと…。ただ、少し疲れているだけです」

「そっか。それじゃあ、俺が元気出してやるよ」

そう言うと、田中さんの手が私の胸元に向けられた。彼の太く、油ぎった指が、私の服の上から乳房を揉み始めた。ぐにゅ、ぐにゅ、と柔らかい肉が変形する感覚が伝わる。私の心臓はどきりと音を立て、顔が熱くなる。嫌な予感がした。彼はいつも、この後が怖い。

「やっぱり刹那は最高だな。この肉付き、たまらないよ」

彼の吐息が私の耳元に向けられる。脂っこい匂いが鼻腔を突く。私は息を殺し、彼の仕草に耐えようとするが、体は正直に反応してしまう。乳首がじんわりと熱を帯びて、硬くなっていくのがわかる。そして、彼の指がついに、下着の穴から覗く私の乳首に触れた。

きゅっ。

小さく鳴るような音とともに、私の乳首は彼の指に挟まれた。冷たく、少し湿った指先の感触に、私は思わず息を呑んだ。ぐりぐりと、彼は私の乳首をねじるようにし

て揉む。じんわりと痛みが走るが、それと同時に、嫌らしい快感が背筋を伝わっていく。

「あ…っ」

私の口から、小さな声が漏れてしまう。

「おっ、いい声じゃないか。もっと聞かせてくれ」

田中さんの目が輝く。彼のもう一方の手が、私の顎を持ち上げ、私の顔をじっと見つめた。

「本当に綺麗な顔だよ。この端正な顔立ちで、こんな場所にいるなんて、もったいないよな。でも、そういうところがいいんだ。この綺麗な顔が快感で崩れていくのを見るのが、俺の一番の楽しみなんだから」

彼の言葉は、私の羞恥心をえぐる。私はどうしようもなく嫌悪感に襲われる。この脂ぎった中年男性の指で、私の体は快感に浮かされ、この顔は快感で崩れていく。その事実が、私を深く傷つける。

「きゃ…っ」

彼の指が、さらに強く乳首をねじる。ぐにゅり、ぐにゅり、と肉が引き伸ばされる感覚。痛みと快感が混じり合い、私の脳は混乱する。もう我慢できない。でも、我慢しなければならない。ここで本気で嫌な顔をすれば、お店に迷惑がかかる。元カレの借金という重い鎖が、私の自由を奪っている。

「きれいだよ、刹那。この顔は本当にきれいだ。涙を浮かべてる顔なんて、もっときれいだ」

彼の指が乳首を離し、今度は優しく撫で始めた。先ほどの痛みがウソのように、心地よい刺激が伝わってくる。しゅわしゅわ、と血が集まってくるような感覚。私の乳首は、完全に勃起して、ピンク色に変色しているはずだ。

「見てみろよ、みんな。この刹那ちゃんの乳首は本当に美しいんだ。このピンク色。大きさも絶妙だろ？こんなに敏感なんだから」

田中さんの声が、店内に響き渡る。他の客たちの視線が、一斉に私に注がれる。ああ、またか。こんな公開の場で、

私の体の細部まで品定めされるなんて、耐えられない。
私は顔をそむけようとするが、田中さんが私の顎を力強く掴み、再び私を見つめる。

「そんなこと言わないでください…」

私の声は震えている。

「なあ、みんなにも見せてやろうじゃないか」

彼の言う通り、彼は私のエプロンを少し持ち上げ、私の胸をさらけ出した。下着の穴から覗く私の乳首は、彼の愛撫によって完全に勃起し、ピンク色に輝いている。他の客たちからどよめきが上がる。

「おお、本当に綺麗だな」

「あのサイズは最高だよな」

「触ってみたいなあ」

客たちの声が、私の耳に痛いほど突き刺さる。私は目を閉じるが、彼らの視線を遮ることはできない。この公開

の場で、私の最もプライベートな部分が品定めされている。この屈辱。

「だろ？俺が言った通りだろう？この刹那ちゃんの乳首は、最高なんだ」

田中さんが得意げに言う。彼の指が、再び私の乳首に触れる。今度は、人差し指と親指で、つまみ上げるようにして揉む。ちぎゅ、ちぎゅ、と小さな音を立てて、乳首は指に引っ張られる。

「ひいつ…！」

私は思わず声を上げてしまう。あまりにも強い刺激に、腰が浮き上がりそうになる。

「いい声だ。もっと聞かせてくれ」

彼は満足そうに微笑む。彼の指の動きが、さらに執拗になる。乳首をねじるように揉み、引っ張り、そして、また撫でる。刺激のオンオフが繰り返され、私の感覚はますます鋭くなっていく。

「刹那ちゃん、本当に綺麗だよ。この顔立ち。この肌。そしてこの乳首。全部が完璧なんだ。俺はお前のファンなんだよ」

彼の言葉は、毒のように私の心に染み渡る。ファン？そんなものではない。ただ、私の屈辱を楽しみ、私の崩れ様を鑑賞しているだけだ。私の端正な顔立ちと、この恥ずかしい格好とのギャップを楽しんでいるだけだ。

「ありがとう…ございます…」

私は、渋々と応える。感謝の気持ちなど微塵もないのに、感謝の言葉を口に出さなければならない。この仕事は、私の魂を少しずつ削っていく。

「そうだ、そうだ。その笑顔、最高だよ」

彼の指が、私の乳首をさらに強くねじる。ぐりぐり、と肉がひずむような感覚。痛みと快感が混じり合い、私の脳はもう白く濁っていく。

「きゃあっ…！」

今度は、抑えられない声が漏れてしまう。

「おおっ、いい音だ！」

店内が沸き立つ。他の客たちが、私の反応を楽しんでいる。彼らの視線が、私の肌を焼き付けるように感じられる。

「見てくれよ、みんな。この刹那ちゃんの乳首は、こんなに敏感なんだから。ちょっと触れただけで、こんな声を出すんだぜ。本当に素晴らしいだろ？」

田中さんの声が、店内に響き渡る。彼は私の乳首を品評会の展示品のように扱い、その細部まで他の客に説明している。私はまるで市場で売られている家畜のように感じられ、羞恥で頭が真っ白になりそうだ。

「このピンク色、本当に綺麗だろ？大きさも絶妙だ。大きすぎず、小さすぎず。この乳首を触っていると、俺の心臓も高鳴るぜ」

彼の指が、私の乳首を優しく撫でるように動く。指紋の凸凹が、敏感に感じられる。

「すごいな、見られているみたいじゃないか。刹那は人気者だ。」

田中さんが笑いながら、さらに私の乳首を弄ぶ。くりくりと、彼の指が乳首をもち上げる。快感と羞恥が混じり合った熱波が全身を襲い、私はもうどうすることもできなかった。

「あっ、んぐっ…だめ…あああっ…」

声にならない声が喉から溢れ出す。

そのとき、店の入り口が静かに開いた。チリン、と高級なベルが鳴る音と共に、一人の男性が入ってきた。店内が一瞬、静まり返った。そして、ざわめきが起こる。

「…あれ、あの方は…」

「まさか、水瀬さんじゃないですか？」

「うそ、本当に水瀬優斗さんだ！」

メイドたちの間で、小さな声が飛び交う。店長が、あわてて入口に駆け寄っていく。彼の額には汗がにじんでいる。

「水瀬様！いつもお越しいただき、誠にありがとうございます！
います！今日もごゆっくりお楽しみくださいませ！」

店長の声が、いつもより少し高く、震えている。水瀬優斗。この店の最上級VIP。外資系銀行のトレーダーで、スーパーエリート。モデルやアナウンサーを元カノに持つ、超プレイボーイとして有名な男だ。

私の隣に座る田中さんも、彼の姿に気づくと、一瞬動きを止めた。彼の指が、私の乳首から離れる。ふっと解放された乳首が、空気の冷たさに震える。